

アメリカ・ボストン美術館 木造僧形八幡神坐像 模刻制作研究

小林 百代 (東京藝術大学大学院)

1. 研究目的

本研究では、アメリカ・ボストン美術館に収蔵されている康俊作僧形八幡神坐像の模刻研究を通して鎌倉時代の造像技法と康俊の表現方法を学ぶことを目的とする。また、ボストン美術館での公開制作を行い海外における日本の仏像彫刻への理解を深める。

(1) 本像について

名 称：木造僧形八幡神坐像

所有者名：ボストン美術館

制作年代：鎌倉時代

指定文化財の種別：未指定

法量 (cm)：

像高 82.0 頂-顎 23.5 面幅 15.2 耳張 21.1 面奥 22.1

臂張 69.0 膝張 68.6 裾張 92.9 膝高 17.0 膝奥 54.5



〔図1〕ボストン美術館収蔵 僧形八幡神坐像

(2) 形状

僧形。顔は正面を向き、跏趺坐する。左手は膝の上において掌を仰ぎ、右手は屈臂し掌を内に向け胸前にかかげる。両袖端は左右台座上に広がる。

(3) 品質構造

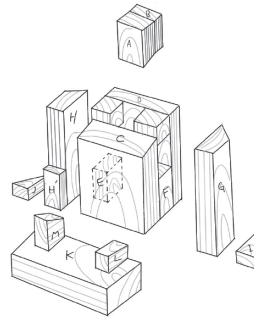
ヒノキ材。寄木造。挿首、錆下地に彩色、玉眼嵌入。頭部は両耳上を通る線で前後2材に割り矧ぎ、内刳を施す。玉眼を嵌入し、首柄で体部襟に挿込む。体幹部は前面1材、背面1材、中間に4つの角材を挟んで構成される。内側は四角く内刳りを施す。これに両肩から裾に至る側面材を寄せ、さらに袖端材を矧ぐ。膝前は横1材を寄せ、その上面に両袖口材を矧付ける。両手先は各1材で作られ、両袖口に差込み矧付ける。像表面は全面に布貼りとサビ下地と彩色を施す。現在、頭部前後材の矧目は接合されているが、首柄下端に開いている内刳穴から、後頭部内側に墨書銘が確認されている。楷書で「南都興福寺 大佛師 法眼康俊作 嘉暦三年十一月廿六日」と記される。

2. 制作工程

1. 調査 2018年12月、ボストン美術館にて像の熟覧調査、写真撮影、写真による3D計測を行った。
2. 塑像制作 造形の理解と復元箇所の確認を行うため粘土で試作を行った〔図2〕。
3. 木材調達 木取り図を作成し、材木店で木取りの相談と見積もりを行った〔図3〕。
4. 木取り 写真資料をもとに木目の方向を決め、木材の製材を行った。
5. 転写 3Dから図面を制作し、製材した木材に転写を行った〔図4〕。
6. 枅穴 枅穴を作り、各部材を接合した〔図5〕。
7. 粗彫り 転写した線の外側2mmの位置まで鋸を挽き、鑿で落とした。
8. 挿首 襟部分と挿首にカーボン紙を当て、刃物を用いてすり合わせを行った〔図6〕。
9. 中彫り 鑿や小道具で全体の形を彫り進めた〔図7・8〕。
10. 滞在制作 ボストン美術館で両手、両袖先、頭部の公開制作を行った〔図9〕。
11. 仕上げ 全体の形の印象が整った後、小道具や彫刻刀で細部の仕上げを行った〔図10・11〕。



〔図2〕 塑像制作



〔図3〕 木取り検討図



〔図4〕 図面転写



〔図5〕 膝前の枅穴



〔図6〕 挿首のすり合わせ



〔図7〕 左手



〔図8〕 右手



〔図9〕 ボストン美術館での公開制作



〔図10〕全体



〔図11〕仕上げ

3. 制作所見

調査および西川杏太郎氏の構造図から、本像は18材からなる寄木造の像であることが分かった。この像の体幹部には約40cm角の大きな材が用いられており、この大きさの材の入手は非常に困難であった。そのため今回は、大きな材が必要な胴体、両腕、膝前には小材を束ね1材に見立てたものを用いた。さらに3Dデータを使用することで、より正確に素材を無駄なく使うことが可能になった。また熟覧調査と写真資料、X線から、玉眼の当木には竹が用いられていることを確認することができた〔図12〕

康俊は鎌倉時代から南北朝時代にかけて活躍し、1315年～1329年の間に8つの作例を残している。奈良の西大寺で活動していた時期もあり、そこでは善派と呼ばれる仏師集団が主に活動していた。善派の像には玉眼の固定などに竹を用いる例が散見される。康俊は慶派の第5世代の仏師であると言われているが、このようなところに善派の影響が見られた。



〔図12〕玉眼を固定する竹の留め具

本像は寄木造により分業や材料の節約が可能になるが、各部材の造形の統一感を出すことに難しさを感じた。康俊の表現は一見すると単純な造りにみてとれる。しかし、張りのある頭蓋骨や表面の繊細な仕上げ、衣文の表現からは重量感が見事に表現されている。坐像という動勢の少ない像でありながら、像全体を威厳あるものに行っていると感じた。当時の造像技法や、繊細な彫りを模刻制作によって追体験することで、康俊の熟達した表現方法を学ぶことができたと感じる。

4. おわりに

ボストン美術館のご協力により現地での公開制作も行うことができた。多くの来場者やスタッフが抱いていた「なぜ機械ではなく人の手で模刻像を彫るのか」という疑問に「当時の制作方法を追体験することで当時の造形感覚や構造技法を学び、それらを後世に伝承することができる」ということを伝えることができたと感じる [図 13・14]。



〔図 13〕美術館スタッフへの説明



〔図 14〕来場者への説明



〔図 15〕木造僧形八幡神坐像 模刻

謝辞

本研究に際し、模刻研究をご快諾してくださいましたボストン美術館の保存修復家 Abigail Hykin 様ならびにお世話になりました保存修復家 Tanya Uyeda 様・学芸員の皆様、各方面でご指導ご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 西川杏太郎「快慶作弥勒菩薩像と康俊作僧形像 ― ボストン美術館蔵品調査報告 ―」（『國華』第 77 編第 7 冊）國華社、1968 年
田邊三郎助「大仏師康俊・康成について」（光堂千手寺編『大仏師康俊・康成の研究 ― 千手寺千手観音立像修理報告書 ―』恵日山光堂千手寺、1997 年）
堀田謹吾『名品流転 ― ボストン美術館の「日本」』日本放送出版協会、2001 年
奥健夫「金剛宝戒寺大日如来像と仏師康俊」（『戒律文化』3 戒律文化研究会、2005 年、77－85 頁）
奥健夫「奈良の鎌倉時代彫刻」（致堂編『日本の美術』536 号、ぎょうせい、2011 年）
山本勉『東国の鎌倉時代彫刻 ― 鎌倉とその周辺 ―』（致堂編『日本の美術』537 号、ぎょうせい、2011 年）
清水恵美子『岡倉天心の比較文化史的研究 ― ボストンでの活動と芸術思想 ―』株式会社思文閣出版、2012 年
大橋一章・松原智美編著『西大寺 ― 美術史研究のあゆみ ―』株式会社里文出版、2018 年

写真出典

図 1: ボストン美術館 HP より引用 <https://collections.mfa.org/download/18293> (2020・0122)